

現在の日本列島の状況

2度目の3.11がやってきました。この東日本大震災は地学的に激動の時代の始まりと考えたほうが良いと思います。地震活動には色々な周期性があり、第二次大戦後の60年は、日本列島は非常に地震活動が静穏であった時期なのです。これはまさに高度経済成長を助けたという事になります。換言すれば近代的な都市は地震の洗礼を受けずに発展できた事を意味します。近代都市を襲った最初の地震が1995年の阪神大震災でした。

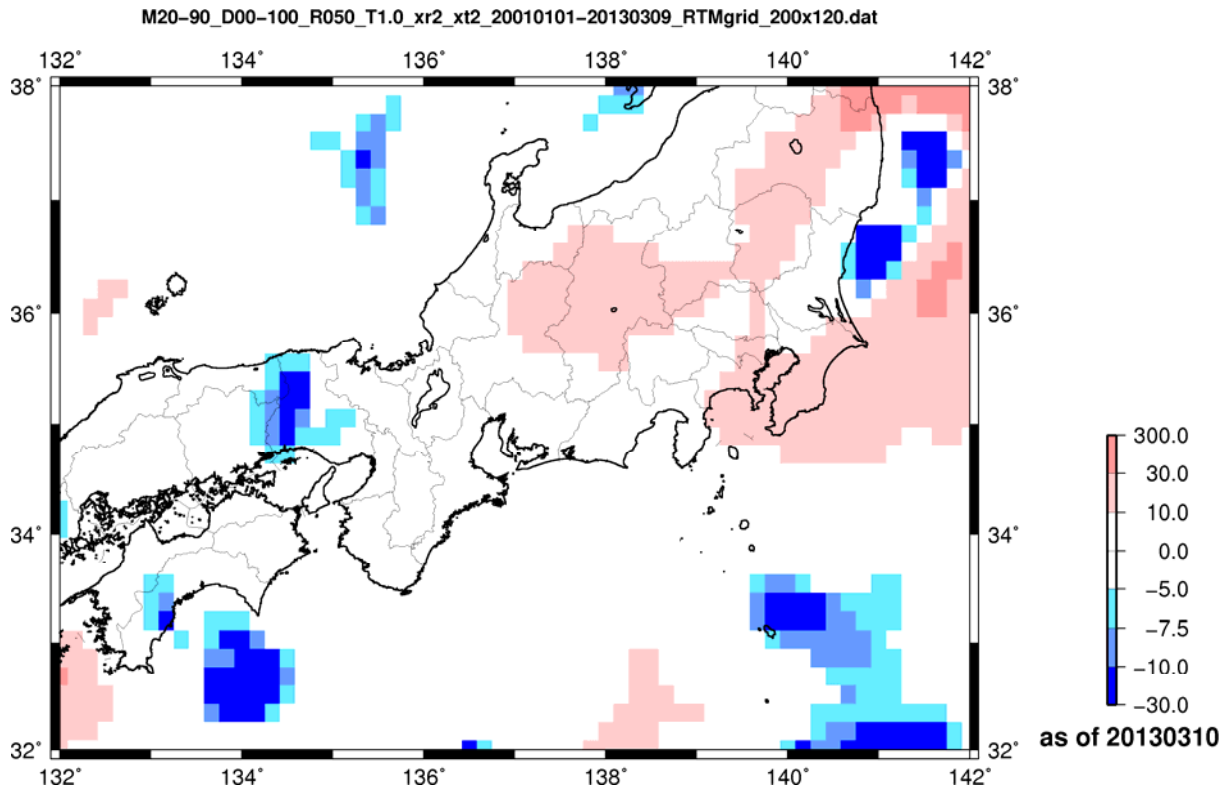
それより大きな(長い)周期の活動として、現在問題視されていますのが、およそ1000-1200年周期と考えられるものです。前回の東日本大震災とも言える9世紀の貞観地震(869年)を含む時期には活発な地震・火山活動が日本列島を襲いました(青木が原樹海を作った富士山の大噴火(貞観噴火)、関東での巨大地震(878年)、西南日本での巨大地震(887年の仁和の地震)等)。

3.11はまだ終わっていないという認識をお持ち下さい。

中部および近畿地方の状況

下の図は3月10日の時点での関東以西から中部・関西地方の地下天気図です。この解析は陸域に焦点を当てていますので、海域の異常についてはあまり重視して頂かなくて結構です。

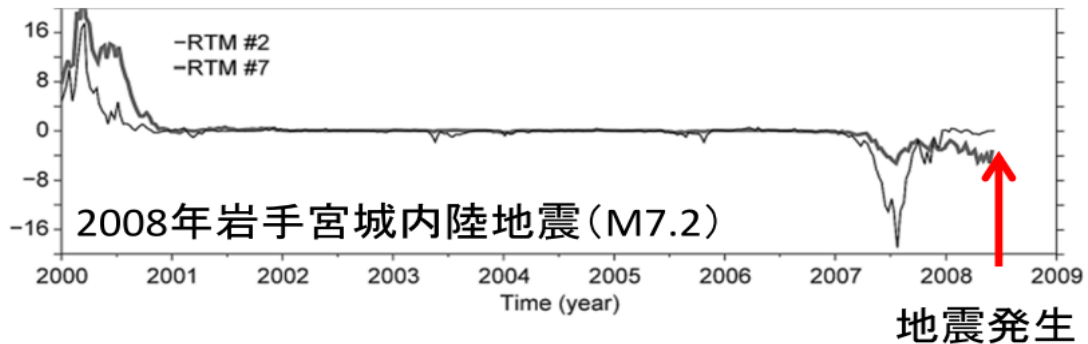
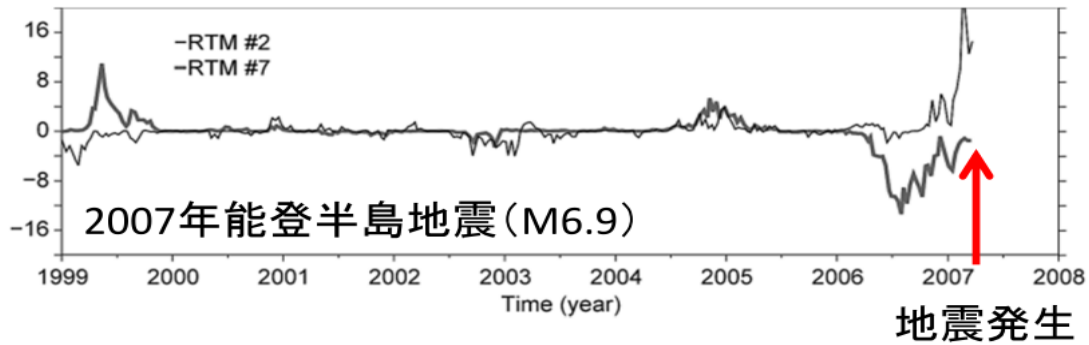
現時点で顕著な異常といえる静穏化は発生していません(領域が狭い)。これまで継続的にお知らせしてきた京都周辺の異常ですが、現時点では小康状態と言えらると思います。



## 地下天気図のもう一つの見方

これまで上のような地図上に示した地下天気図を紹介して参りましたが、実はこれは地下天気図の一つの側面からの見方です。つまり上の図では「3月10日時点」の異常の有無はわかりますが、それがどのように推移してきたかという情報（時間変化）を含んでいません。

### 地下天気図(RTM)の時間変化



上の2枚の図は2007年の能登半島地震と、2008年の岩手宮城内陸地震の前8年間のRTM時間変化を示します。線が2本ずつあるのは、RTMを計算するパラメータを複数表示してあるという意味です。下に示す図は京都（北緯35度、東経135.8度）におけるRTMの変化です(2003年1月から2013年3月9日まで)。2012年後半から一時静穏化が開始したのですが、それほど大きな値では無いという事がわかります。今後このような時間変化のグラフも随時紹介して参ります。

地下天気図について、まずは <http://www.sems-tokaiuniv.jp/EPRCJ/rtm.html> をご一読下さい。

